



讚岐遊覽

琴茶肉

270

67

特

3

通覽略圖



阿波國

遊談 岐琴平按内

旭川 中村彌平太

緒言

編 45. 3. 28

内表

旅歩行きて他郷に遊び、名勝の地山水の麗はしき、
境に接せば良心の鄙吝自ら洗はれて、慥かに我が徳を進む
るものなりとは、夙くの昔に具原益軒先生より教へられた
る事なるが、世智辛らき浮世にも多少の閑はあるべく、貧
乏神も稼ぎの上手には追つ付く可くもあらずして、餘財は
空しく篋底に狂鳴るべし、されば此の時、異郷に山紫水明

を尋ね、名勝舊跡を訪つるは、蓋し命の洗濯、百年壽命の基なるべし、由來讚岐の土地は、舊蹟に富みて、激波濤々たる瀬戸内海に瀕し、其風光美は設令んに物なし、今旭川が諸氏を導ひきて、讚岐遊覽をなし、靈顯いちやちこなる琴平詣でを爲さんとするは、諸氏の命に洗ひ張を爲し、大隈伯のそれには綾からず、百二十五歳を青年時代とし武内宿禰に三舎を避けしむべき、五百有餘歳の末までも、最と健やかになからへて、家には平和の風れ溢、福德圓滿の生涯を、遂げさせ得させ奉らん爲めなど、決して恩を被せるにも非らず唯御旅行の其序、名勝舊跡の梗概を、御案内致

さん爲め、イデヤ寄せ來よ、西より北より東より、集ふ目當ては岡山驛。

岡山驛

イヨ一岡山驛、敢て旭川に擔かれた譯にはあらねども、斯う人の山では方角立たぬと、お謂ひ召さるな旭川、これに控へて候、抑もこの岡山は日本で第七番目の都會、人口拾萬、日に増し月に殖ゆる始末、人の岡山か、岡山の人か、應ては大阪をも凌かん勢ひ、日本三公園の一なる後樂園には、九軍に鳴く丹頂に平和の春を思ひ、十七師團の練兵場

に幾多の疵跡が武を練るは儘かに東洋の盟主と自覺し、
 然たる岡山城の天主閣を眺めて、米の實る木を知らぬ昔を
 思ひ、京橋渡りて東山に上り、名君賢臣の遺蹟に感じ、果
 ては祈らば何なりと金銀財寶思ふが儘、授け賜ふと謂ひ稱
 す中國線の稻荷山、高松稻荷大明神、お釜のドーシの吉備
 津宮、少し遠ひか兒島の法師の高徳が、赤き心を墨で書く
 院の庄の舊蹟やら、紅葉の豪溪まで訪ねては、岡山驛でも
 四日は費へる、サア早く宇野線にれ乗りなさい、琴平往復
 三等壹圓七拾八錢但し宇野迄片道三等三拾四錢貳等五拾壹
 錢發車時刻は次の通り

岡山發

岡山	鹿田	妹尾	早島	茶屋町	味野	由加	入濱	宇野
前 五、〇〇	三、〇五	六、二五	六、三三	六、四〇	六、四八	六、五八	七、〇六	七、〇三
全 六、〇八	六、一三	六、二五	六、三三	六、四〇	六、四八	六、五八	七、〇六	七、〇三
全 八、四五	八、五二	九、〇九	九、二二	九、三三	九、四四	九、五六	一〇、〇六	一〇、一六
全 一〇、五〇	一〇、五五	一一、〇七	一一、一五	一一、二二	一一、三二	一一、四〇	一一、五八	一一、〇〇
後 二、三三	二、二七	二、三九	二、四七	二、五四	三、〇一	三、一〇	三、一八	三、一〇
全 四、一〇	四、三二	四、五二	五、〇七	五、二二	五、三六	五、五二	六、〇六	六、一六
全 六、二五	六、二五	六、四四	六、五五	七、〇五	七、一五	七、二八	七、三九	七、三三

宇野線には乗り込んだり、鹿田の驛は直ぐ越して、
味尾早島、茶屋町を過ぎ行く次は味野驛、野崎の財産幾許
かと餘計な考へする間もなく、由加驛には着きたれど、由
加神社の参拜は戻りの事よと失敬し、左に兎島の漁船を眺
め、八濱越して墜道潜ぐり、塩濱見て居る其内に驛夫は迂
鳴る、宇野、宇野と、(其間壹時拾分なり)

宇野驛

列車の箱より遣ひ出し見れば、音に聞ひたる宇野驛も、唯
一面の砂つ原、丸薬位の小家が五六、彼方此方に點在す、

海には漁船の七八艘成る程これでは縣費五十萬の手前、發
展願きも無理からず、鐵道院の棧橋には客を迎ふる連絡船
あり、全然宇野の繁榮を呪ふが如くに見へたりける、扱て
連絡船は二隻ありて高松、宇野間を往復せり、花見る春の
晨どか、紅葉を探くる秋の頃、必要あらば何時でも二隻は
三隻に増すとかや、イザ連絡船に乗り込まん

新	宇野驛	4.20	7.30	12.20	3.40	8.10
高松	着	5.40	8.50	1.40	4.50	9.30

この連絡漁船は玉藻丸に坂鶴丸、船は小さいが船室美麗
其待遇か懇切で上甲板には運動場あり、其内海は浪靜かに

して屋の上にも似たれば、如何に船弱の女でも、甲板のベンチに腰卸し、所謂瀬戸内海の好風景に、吾を忘れて惚るゝ内、ポーくくど鳴る汽笛、ハヤ高松に着きたるなり
(此間登時貳拾分) 宇野、高松間二等五拾錢 三等參拾錢

小豆島

春期は小豆島に連絡島の寄航なきも、初秋の頃よりは土の庄に寄航す、

小豆島の御按内は岡山驛より京橋に至り、土の庄若くは吉ヶ浦寄航の汽船に乗るべし、抑もこの小豆島は播磨灘の

西に在る小島にして香川縣の所轄なり、面積僅に九方里土庄町は島の西南部に位す、島内淵崎村に富岡神社、寶生院大塚村に銚子の大瀑布、其外八十八ヶ所の靈場等あれどもこれ等は御免を蒙りて草壁村の寒霞溪へと御案内申せば、土庄町より四里と半、賃錢往復壹圓を投して人力車に乗り村また町を過ぎ行きて其山麓に下車すれば、お辨當もあれは生きて物言ふ案内人もあり、お土産の繪葉書圖面は下山の時と、小經を辿りて上り行けば、通天窓より紅雲亭一步は一景と變幻極まりなく、奇景怪巖驚くのみ、表十二景の最終なる四望頂には芭蕉翁の

初しくれ猿も小籠をほしけなり

の碑あり四周環海眺望廣濶、眺めは飽く時なかるべし、

寒霞溪

藤澤南岳

經穿瘦嶂怪巖斜 仰看葛蘿紅勝花

兩々三々訪秋客 吟寒落日一溪霞

ハツクシヨン、什麼やら風を引きそうな、今度は裏山を下りて七景を看、待たして置ひた俚に打乗れは土の庄町へ二時間かゝる、

高松市

此處は讃岐の香川郡北端、明治二十八年より起工して五年の後に出來上つたは即ち此の高松港、港内八万餘坪、干潮の水深尙ほ十四尺、船舶常に輻輳し陸なる汽車は琴平に向けて一時間毎に發着す、高松市は當國第一の都會にして舊松平氏の城下なり、戸數八千五百、人口四萬、商工業盛にして縣廳始め幾多の官公衙、學校諸會社劇場寄席等あり物産としては漆器、賣藥、織物、紙などあり、遊廓は東濱町に在りて八重垣と稱し、日夜絃歌の音絶へず、花も愧つろう幾多の美形、嬌艶限りなしとか、オット此様な處へ御案

内しては、不粹の旭川、赤面の基、ドレ高松城へ御案内申上げん、

高松城 この城は一名玉藻城と呼ぶ、天正年間豊臣太閤の時、讃岐十八万石を領せし生駒稚樂頭近規の築く所なりしが其孫壹岐守に至り寛永年間出羽に移封せられ、松平頼重東讃十二万石を領し此城に入り繼承十一世明治の維新となり、今は御覽の通り城門及角櫓あるのみなれど、實に高松市の表看板なり、次ぎは西方寺の遊園に参りませう、

西方寺遊園 高松市の西方少許の丘上にあり、園内松樹多

く四季の花卉を栽培し而かも眺望宜しく瀬戸内海の島々は指呼の裡に在りて風景絶佳、次は栗林公園

栗林公園 天下の名園にして讃岐十二景の随一なり、高松市街に接続し居れども停車場より南十八町を距たる、この地もと栗林莊と稱し延寶年中高松藩主松平頼重、別莊として之を築き四世を経て延享年中頼恭に至り完成せり斯の如く長日月間藩主の富と力とを集注して築きたるもの其面積十六万五千坪、六水十三山を巧に配置し、一樹一石と雖も風韻深く、掬月亭外四五の小亭架橋は清洒謂ふ様なく真に仙境に遊ぶの感あり、次ぎは少し遠けれど天

氣は好し、序に電車にて屋島、壇の浦へ御案内せん、
 屋島、壇の浦 高松市を東に距る一里半、讃岐十二景の一に
 して木田郡北瀉元村に在り、山容屋宇に似て源平二氏の
 古戦城なる事は謂はずもかな、山麓の東を壇の浦と謂ひ
 壽永の昔を偲ひては一掬の涙を禁する能はず、屋島山の
 頂に屋島寺あり、四國八十四番の靈場にして本尊は千手
 觀世音弘法大師の作なりと謂ふ、寺には源平二氏の軍旗
 及合戦の圖等寶物あり、山の東方に下れば佐藤繼信の墓
 あり、これより名勝を尋ねれば五劍山、八栗寺、志度寺
 十二景の一なる津田の松原等あれども、餘り高松附近の

みに時間を費すは面白からず、イザ停車場に引返して乗
 車せん、高松驛より琴平まで二等四拾六錢、

高松驛乗車

朝の一番列車は五時に發し、午後九時四十六分の終列車
 まで一時間毎に琴平へ向けて發車すれば便利此上なし、驛
 より三哩程往きて鬼無驛に着く、此處には下車する程の事
 もなければこの驛より東五町、岩田八幡に沿へる富澤氏の
 庭内に有名なる飯田の藤あり三百餘年を経たる老藤樹にし
 て花房の長さ三尺に餘り、美觀極まりなしなと語る内に早

や端岡の驛を過ぎて國分に着く。

十六

國分驛

此驛に下車したれば驛の北東三丁計りなる國分寺に參るべし、四國八十番の靈場にして、本尊は總丈二丈一尺十
一面千手觀世音菩薩なり、禮拜了れば

國分八幡宮 國分寺より東十丁許りに在り當村の土産神にして寛永の初め高松藩士堀口源太左衛門遺恨を以て同藩の士田宮源八を當社の馬場先に斬る、源八の妻其子坊太郎に父の讐を討たしめんと金刀比羅宮に祈誓を罩め寛永

十七年坊太郎十七歳の時、柳生流の奥義を極め不俱戴天の仇堀口源太左衛門を同じ場所なる當社の馬場先に於て討ち果したるは、所謂金比羅御利生記の仇討なり、次ぎは。

瀧宮天満宮 國分驛より南二里瀧宮村に在り、讃岐十二景の一にして縣社たり菅公を祭る、光孝天皇の仁和四年夏大旱あり菅公綾の城山の神に雨を祈りて甘雨三日に亘る土民大に喜び牛頭天皇の祠前に踊るこれ今の念佛踊の始なりと謂ふ、菅公在任數年任滿ちて京師に歸る、土民の惜別甚しく後菅公紫筑へ左遷の時、笠居の嶺に立寄られ

十七

自筆の肖像と装束の上衣を残し船出し給ふ、後天曆二年
 僧空澄一社を建て曇の遺品を安置す、これ當社の起りに
 して其後康暦年間細川頼之社殿を興し社領を寄進す、爾
 來數々兵燹に罹り現今の社殿は明治六年以後建築せしも
 のなりとか、
 これより國分驛に引返して乗車すれば三哩を往きて鳴川驛
 ・に達す、

鳴川驛

鳴川驛に下車して十町を南せば

鼓ヶ關の舊蹟 に至る丸木の御所跡にして崇徳天皇雲井の
 御所より此所に移らせ給ひ崩御迄六ヶ年間に在ませしと謂
 ふ、其附近に、

城山神社 あり、これ曩に瀧宮天満宮にて御案内した
 る菅公が此社に雨を祈りしなり、これより驛を越して一
 里北に往けば、

白峯山 あり讚岐十二景の一にして亦綾の松山と謂
 ふ崇徳天皇を葬り奉る、高倉天皇の安元年中神殿を營み
 奉祠す、其後神領百石にして白峰寺祭祠を司りしが今は
 宮内省の所管たり、其山腹に白峰寺あり、綾松山洞林院

と謂ひ本尊は千手観音にて四國八十一番の靈場なり、寺中崇徳院の御廟所頓証寺御殿あり、寺寶の主なるものは後小松天皇の勅額、後嵯峨天皇勅納紺紙金泥唐本法華經千鳥青磁香爐浮牡丹花瓶二十八品和歌五十六首、後水尾天皇勅納金襴の御袈裟及世尊寺行俊筆松山縁起卷等其他珍什佳寶數多あり、

それより鴨川驛に引返して再び乗車すれば十分間程にして坂出驛に至る、此所も随分賑やかにして戸數二千八百、人口一万八千、食鹽の生産地として名高く、附近に舊跡あれどもチト疲れたれば下車せず、汽車中にて御案内すれば、

驛より東十八丁に崇徳天皇八十八の水あり、更に十八丁を東せば雲井の御所に達す、驛より西二十五町の處に仙石權兵衛の城跡あり亦南へ一里行けば黒岩天満宮ありと謂つてる内に宇多津驛に着す、此處にも菅公手植の松、搖岩等の外驛の南六丁許りに道場寺あり弘法大師の開基に係り四國七十八番の靈場にして本尊は弘法大師作阿彌陀如來の一尺八寸座像なり、尙ほ驛の東に聖通寺あり、汽車は益々西に向つて進行すれば左手の平野に山容恰も飯を盛りたる如く突起するものあり、これを讃州十二景の一なる讃岐富士にして海抜二千四百四十尺、飯の山と謂ふ、西行法師の歌に

讚岐にはこれをや富士といふの山

朝けの烟たゞぬ日もなし

兎角云ふ内丸龜驛に着く

丸 龜 市

丸龜市は仲多度郡の北部に在りて戸數七千人口二万五千封建時代京極氏の城下にして其の港を那珂港と稱す、金毘羅參詣の要津たりしかば所謂金比羅船々追風に帆かけてシユシユラシユと頗る繁昌を極めたりしも鐵路の便開けしより今は昔の盛況なし、されども市内に歩兵十二聯隊の兵營

其他官公衙數多ありて商況活潑高松市に次で國內第二の都會なり、物産としては團扇に錦莞位のものなり、ドレ少し南しませう

井上通女墓

停車場より南二町南條町の法音寺内に在り

通女は京極家の家臣井上儀左衛門の女、幼より慧敏にして詩歌を能し雅才を以て世に聞ゆ

しるべせよ浪間をわけて行く船の 通 子

心しられぬ八重のしほ風

田宮坊太郎墓

通女の墓より二丁、京極家の菩提所支要寺

内に在り、巖に國分八幡宮の條りに紹介したる如く坊太

郎は金毘羅御利生記の主人公なり

丸龜城跡 停車場より南十丁、丘陵の上に聳ゆ則ち丸

龜城跡にして一名蓬萊城と謂ふ、この城は慶長年中生駒親正の築く所にして其後寛永十八年山崎甲斐守入城し五万三千石を領せしが萬治元年京極高和入府し累世以て明治の維新に至る、此地海拔百五十尺、

中津公園 丸龜驛より西十八町六郷村の海濱に在り萬

象園と號す、貞享年中丸龜藩主京極氏の築く所にして其下屋敷なり、園内山水を築き、老松珍石を配し小亭四五ありて清洒掬すべし、欄に凭れば遙に瀬戸内海白帆の去

來、島影一眸に映じ麗觀去る可らず、今は竹田氏の私有に屬せるも一般公衆の遊覽に供し四時曳杖の客絶へず、夏季は海水浴場の開かるゝありて鐵道院も爲に臨時中津驛を設け、遊客の便に供すと云ふ

此處まで來て丸龜驛へ引返すも十八町、更に進んで多度津驛に至るも十八町一層の事に徒歩にて辿らんか那

多度津驛

多度津町は仲多度郡に屬し戸數二千、人口九千、備後以西九州一圓より琴平參詣の要津に衝り船舶常に輻輳し帆檣

林立、鐵道は東高松より來り琴平に通せるを以て商業甚だ盛なり、此地にも封建時代今の停車場に東接したる海濱に多度津城ありしか元龜年中香川兵部少輔景房の築く所にして天保の初年京極高道多度郡の内一万石を領して此城に入りたるが明治の廢藩に及び之を毀ち今は尋ぬ可くもあらず驛より西十二町に

海岸寺

あり弘法大師修學の地として有名なり、地

は仲多度郡白方村屏風ヶ浦の海濱に在りて本堂は白砂青松の間に、奥院は丁餘を距てたる小丘の麓に、極めて風景絶佳なり

此外西一里半に彌谷寺あり行基法師の開山にして、弘法大師の修理に係るもの及び西三里に仁尾の平石あり、石の大サ東西九間南北七間優に百二十疊を敷かれ數百人を座せしむるに足ると云ふ、共に一遊の價値あるも、鐵道の便なければ多度津驛に引返して乗車す、間もなく金藏寺驛に着く此驛附近に金倉寺あり智証大師の草創にして天台宗なり、四國七十六番の靈場にして寺領三十石、七堂伽藍ありて勅願所たりしと謂ふ、大般若經十六善神其他國寶珍什枚舉に違あらずなど語る内汽車は善通寺驛に着く

通善寺町

善通寺町は昔より善通寺の爲めに稍繁昌せしが第十一師團の兵營設置以來頓に面目を改めて人烟日に月に殖へ今は頗る隆盛にして尙ほ將來發展の趨勢慥なり、何は扱て置き善通寺へ參詣せざる可らず、

善通寺

驛より西十町の所に在り四國七十五番の札所にして五岳山誕生院と號す、本尊は弘法大師作の藥師如來なり、此地は弘法大師誕生の地にして其邸庭の跡なり、大師唐より歸朝の後、父善通、母玉寄及び祖先追

善の爲め當寺を建立し父の名を以て寺號と爲したるなり寺門を入れば右に五重の常行堂左に積善功德堂、正面には金堂あり、其外宏大なる堂宇相連りて實に讃州第一の巨刹なり

禮拜了つて驛に歸り列車に投ずれば十分に於て琴平驛に達す

琴平

琴平驛は讚岐鐵道の終點にして、往古は仲多度郡の一寒村なりしも慶長の頃より此地に鎮座ましまする金刀比羅大

・權現の威靈を崇拜するもの陸續として去來し、今は戸數千五百人口八千に餘り、四方より參詣の客常時絶ゆる事なく廣大なる旅舎頗る多し、先づ驛を出て二丁許りにて四辻達にす、右に折れて進めば此所内町、幾多の旅館商店は客を呼ぶに忙しく、春秋の候は參詣客にて殆ど肩磨穀撃す、益々進みて石段を上り唐銅の鳥居を潜りて猶石階を上れば右側に

崇敬講本部

ありそれに隣して時報の太鼓樓あり、其側に石碑を立て櫻樹を植へ柵を圍らせるものあり、是れ有名なる清少納言の塚なり、直ぐに

神籬大門

に至る此門は慶安年中の改修に係り其扁額琴平山の文字は有栖川の宮熾仁親王の御筆にして次は

櫻の馬場

なり玉垣左右を限り石燈籠相並び櫻樹數千春風駘蕩の候は爛熳たる櫻花日光を遮りて全然花の墜道の如し、少し進んで右手に小高き丘あり、これを

青葉岡

と謂ふ噴水を作り樹木を植込み清酒にして眺望に富む、其處に石造二階建の建物ありこれ寶物館にして幾多の珍寶を並列し一般參詣者をして隨意拜觀せしむ、再び櫻の馬場に出で西に向ひ石鳥居を経て猶石段を上れば神馬舎ありて神馬三頭無聊を啣つに似たり、御厩

より少し行きて右手に

社務所

あり昔し別當金剛院の館にして壯大美麗を極む、祈念札、守札等の授與を乞はんとするものは此所に來るべし、支關は唐破風造りにて、表書院鶴の間、虎の間、七賢の間、二の間等孰れも圓山應學の麗筆なり、殊に表上段の床なる保津川上流の瀑景は天下無比の稱あり、其他岸岱若冲等の筆に成るもの光彩陸離たり、出づれば木馬舎あり、舊高松藩主松平頼重寄進の木馬三頭を納む、猶昇れば祓戸社、火雷社、西南役の旌烈碑等あり

旭社

に至る、天照太神外七座の神を祭る、社殿は銅瓦葺にして高六丈、桁梁共に十間、上屋根の裏には飛雲を彫刻し、柱扉には花鳥人物等を彫り込み、藝術の精華驚く可きものあり、これに續き西に面し長廊下あり長十八間、嘉永年中の創立なりと謂ふ、それより銅の華表を潜りて

賢木門

あり優美なる建物にして其扁額の文字は熾仁親王の御筆なり、此門を入りて右に遙拜所あり、これより樹木鬱蒼として神寂ひ、末社二三ありて石段を上れば

本社

に達す、琴平山の中腹に位し、大物主命を祭り相殿に崇徳天皇を祀る、往時より象頭山金毘羅大権現と稱し世人の崇敬一方ならず、昔は金剛院の僧別當たりしも明治維新の後、金刀比羅神社と改稱せられ國幣の中社となる、鎮座の年月詳かならざるも慶長の頃より、衆庶殊に海員の欽仰する所となりて大に著れ、歴朝の皇室亦甚だ崇敬せられ、勅命を以て祭儀を修め、社殿を修築したる事再三に止まらず、殊に桃園天皇の御宇には日本一社勅願所の綸旨を給ひ、今上陛下にも御短刀を勅納あらせられ其社格を進めらるゝなど、遠き昔より今に至る

まで威靈赫々たり

金刀比羅宮

大勳位 貞愛親王

神のます琴平山の月影は

曇りなき世の光りとぞ知る

社殿は檜皮葺にして九坪餘、左右の壁板には櫻樹を繪書き其花辨には黄金を彫め人目を射る、中殿亦九坪餘、拜殿は二十六坪餘にして其天井には花卉の蒔繪を施し向には金色燦爛たる菊花の御紋章を附せり、附近七八の末社あり、神饌殿と拜殿との間なる北渡殿の下を潜ぐりて行けば黒門あり、越して卯の花谷と謂ふ急坂二丁を攀づれ

ば

奥の社

に至る、これを慶長年中金毘羅大権現の別

當たりし金剛坊宥盛を祀れるものにして、其守護繁盛に偉大なる功績ありたる人なり、されば明治四十五年金刀比羅奥社三百年祭として参宮團なるものを案出し、日本全国を勧誘したる爲め、三月より五月まで四方より集り來たる参詣者を以て讚州一國を埋め立て、琴平町を押し潰さんまでの盛況を呈したり、當宮の寶物には歴朝の御宸翰類及び御寄附の什器刀劍其他文人雅客の珍什佳寶枚舉に違わらず

これより下山の途に就き社務所にて祈念札を受け、小さきお札を授かりしものは門を出で、札箱を購ひ、お土産の繪葉書、圖面等を糞り歩行きて下山し唐銅の華表を出で、間もなく右手に

琴平公園

あり愛宕山麓より其絶頂に達する清洒なる

丘陵にして、其頂上より展望すれば眼界無限に開らけ、讚備の水光山色一眸に入り、突兀たる讚岐富士、瀬戸内海の白帆、恰もパノラマの如し、園内に香川縣共進會あり、一巡して出で一丁ならずして其分館水族館あり（共進會は三百年祭の間）それより東十町の地に高燈籠あり

高サ十三間、住吉のそれと並稱せらる、尙ほ琴平驛より東南五十丁に満濃池と稱する讃州第一の溜池あり、弘法大師勅命に依りて築きしものなりとか、周廻三里四十ヶ村の灌漑に供す、亦驛の西六丁に小瀧温泉あり幽邃閑雅風致に富む

サアこれにて讃州の名勝も大体は遊覽し、目的の琴平參拜も終りたれば今夜は琴平に一宿せんと彼れ之れ詮議の末何れの宿屋に這入るとも、お世辭ダラ〜槌で庭掃く其有様、一風呂浴みて安座を組めば、室の清洒には似もやらず案外粗末な膳部のお料理、一本二本と銚子も變れば何んば

讃岐でも陶然と來る、仲居は程を見澄まして旦那一時間と斬込む、ウンと首を縦にでも振ろうものなら、ハヤ敷居外に今晚は。眼覺めて見れば日は三半、朝食を済ましておアイン見て、何だ馬鹿々々しい不廉いナアは既に遅い、御用心々々々、此處まで來れば東道役の旭川も責任解除、汽車は琴平驛より高松に向ひ一時間毎に發車す。

『袂別に望んで各位の健る康を祝
し其萬歳を祈る!!!』

明治四十五年三月十八日印刷
明治四十五年三月廿二日發行

定價拾五錢

編纂兼
發行人

中村彌平太

岡山市大字下石井三百一番地寄留

印刷人

川崎正義

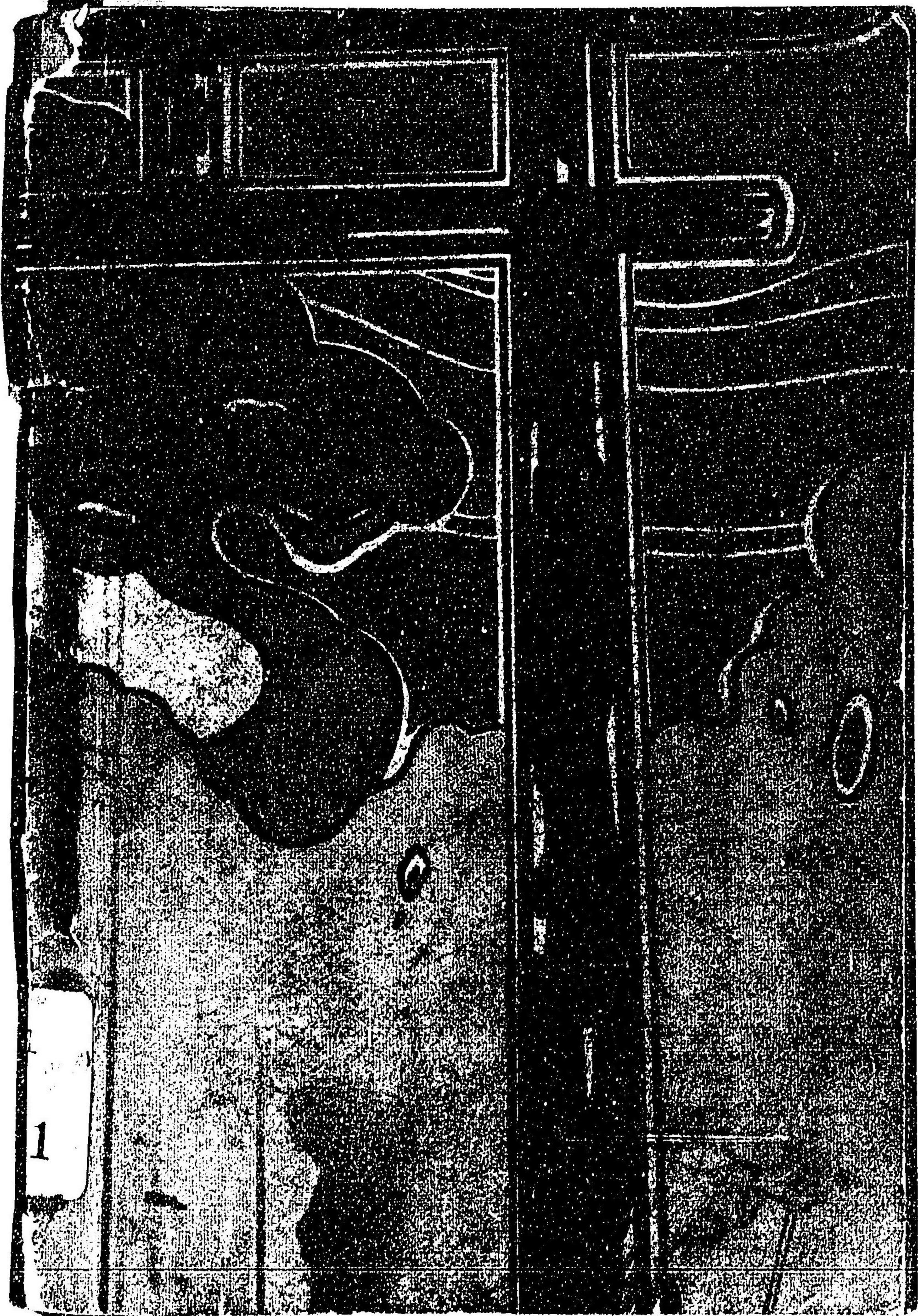
岡山市大字西中山下五十三番地

印刷所

岡山印刷株式會社

岡山市大字西中山下百七十八番地

270
67



026068-000-4

特61-381

琴平按内(讚岐遊覽)

中村 弥平太/編

M45

ADC-3721



特61
381